

確かな書写力を身に付け、書こうとする意欲を高める書写の授業づくり

～動きの学びから字形の定着を目指す～

三谷早苗¹・住川英明²

¹鳥取大学附属小学校

²鳥取大学地域学部

国語科書写では、硬筆書写において、「めあてを理解し、自分の課題を見付ける」「水書用筆を適宜取り入れ、効果的な学び方を行う」「学びをほかの文字や日常へ生かす」の3つの学びのプロセスに着目した授業実践を行った。今年度は、特に、「学びをほかの文字や日常へ生かす」ということに重点を置いて取り組んだ。その結果、学習中では、学んだことを生かして書こうとする様子が認められた。しかし、日常生活に生かして書くという点では、十分ではないということが分かった。また、水書用筆を用いることによって、特に終筆において、力の入れ方や運筆を意識して書くことができた。さらに、子供たちが、課題の発見や解決、振り返りの場面で、話し合いを通して、学びを共有し深めたり、それぞれの良さを認めたりすることができた。

キーワード：日常への広がり、水書用筆、話し合い、相互評価

1 はじめに

1.1 国語科書写の未来へつなぐ授業づくりの視点

1.1.1 国語科書写特有の見方・考え方

国語科では、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成するために「言葉による見方・考え方」を働かせることが重要となる。書写においても、習得した知識や技能を生かして、言葉の力や文字を書く力を育成することが大切である。そこで、国語科書写の見方・考え方として、次の3点を挙げた。

(1) 書写する力

書写の基礎基本、原理原則が分かり、自分の課題やめあて、文字の整え方が分かる。課題やめあてが分かることで、教材を見て書くだけでなく、どこをどのようにして書けばよいか、どこに気を付けて書けばよいか見通しをもって活動することができる。また、水書用筆を活用し、点画の書き方やつながりを意識しながら、字形を整えて書くことができるよう効果的な学び方を行う。

(2) 伝え合う力

書写で学習した学びを振り返ったりまとめたりするとき、書写の言葉（「○画目」、「止め」、「曲がり」、「すうっ」、「びたっ」など）を用いて説明したり、自分や友達の良さや課題を話し合ったりすることができる。それにより、学んだことを意識し、広げることができる。

(3) 活用する力

書写での学びを、ほかの文字や他教科、日常生活に生かすことができる。書写で学んだ原理原則を使って、ほかの文字に生かせるところはないかを考えて書いたり、文字の大きさや配列、筆記具などを工夫して、普段の学習でノートを書いたり、ポスターや新聞作りなどに生かしたりする。

1.1.2 国語科書写の提案する学びのプロセス

(1) めあてを理解し、自分の課題を見付ける

めあてを知り、試し書きで今の自分の文字と教科書の文字とを比べて、課題を見付ける。

確かな書写力を身に付け、書こうとする意欲を高める書写の授業づくり ～動きの学びから字形の定着を目指す～
課題から、書き方（始筆・送筆・終筆、画の長さや方向、間隔など）の違いはどこにあるのかを考え、見通しをもって書く。課題や解決方法を見付ける際、自分で考えるだけでなく、友達と考えたり学級で考えたりするようにし、学びを深めたり、共有したりさせる。

(2) 水書用筆を適宜取り入れ、効果的な学び方を行う

課題解決に向け、練習に取り組む際、水書用筆を適宜取り入れるようにする。水書用筆を用い、「止め」「払い」「はね」などの違いを意識して書き、硬筆で確かめ、力の入れ方の加減や滑らかな運筆ができるようにさせる。水書用筆を用いることで、力の入れ方の加減が分かり、動きに過度な負担をかけず、無駄なく書くことができ、高学年における速く書くことの意識付けにもつながる。また、水書用筆を用いることで、筆圧だけでなく、点画のつながりを意識でき、第3学年以降の毛筆書写の学習にもつながる。

(3) 学びをほかの文字や日常へ生かす

学習した文字と、ほかの文字とを比べ、同じところや学びを生かせる文字はないか考えさせ、ほかの文字に生かすようにする。また、教材の文字だけでなく複数の文字を集め、共通する特徴を見出したり、分類したりすることを通して、自分が納得しながら、主体的に知識を身に付けられるようにする。さらに、書写の学習の積み重ねにより、文字の大きさや配列を考え、相手を意識した読みやすく分かりやすい文字を書く力を身に付ける。

1.2 国語科書写の未来へつなぐとは

書写においては、習得した知識や技能を生かして、全ての学びの基礎となる言葉の力や、相手に分かりやすい文字を書く力を育成することが大切である。また、日本の言語文化に親しみ、言語文化を継承・発展させる態度を育成することも大切である。書写の学習で、書き初め、平仮名の書き方、五・七・五の作品作り、手紙の書き方など、日本の伝統や文化、言葉の響きやリズムを味わい、国語科の教材や他教科と関連させたり、日常生活に生かしたりしながら、活用できる力を育成していきたいと考える。書写の学習を通して、相手を意識して文字を書き、自分と言葉や文字をつなげ、文字を通して、自分と他者とをつなげ、さらには自分と社会とをつなげていきたい。そうすることで、自分のこれからの人生を豊かにし、生きて働く力となり、未来へつながる力となると考える。

2 問題の所在

小学校入学後に平仮名を学習してからも、書く文字の字形や筆順の変化が感じられない子供もいる。また、「止め」「はね」「払い」「折れ」「曲がり」などを理解し、学習した直後においては、あるいは、すでに学習した文字については、意識して書こうとするが、慣れてくると、終筆を意識して書くことがおろそかになったり、「折れ」と「曲がり」の区別が付きにくい文字を書いたりすることがある。ほかの文字や日常生活には学びが十分に生かされておらず、書写で学習したことが、書写の授業だけで完結してしまい、他教科と関連させたり、日常生活に生かしたりすることができていないことが多い。文字を正しく整えて書くために重要な筆順についても、自分が書きやすいように書いたり、適当に書いたりすることがあり、おろそかになっていると感じることがある。正しい筆順で書くことも、次の画につながりがあるよう点画を意識したり、画の接し方や交わり方を意識したりして書くことに密接に関わってくる。また、子供は、正しく整った文字を書きたいという思いはあるが、何をどう書けばよいか分からない、どこをどのように書けば正しく整った文字が書けるかを理解していないことが多い。

このような点から、昨年度、第1学年の書写では、水書用筆を用いて、「止め」「はね」「払い」といった筆圧の変化を伴う運筆を体感させ、硬筆に生かせるよう意識付けてきた。子供たちは、水書用筆を使うことで、「止め」や「払い」の力の入れ方の加減を理解することができるようになってきた。また、書写の学習だけでなく、新出漢字の指導の際に、点画のつながりを意識し、次の画につながるよう終筆の向きについても意識して指導してきた。しかし、

学習のノートや漢字練習など，日常に生かして書くという点では，まだ十分とは言えない。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

本研究では、「めあてを理解し，自分の課題を見付ける」「水書用筆を適宜取り入れ，効果的な学び方を行う」「学びをほかの文字や日常へ生かす」の3つの学びのプロセスに着目した授業を提案する。硬筆書写において，水書用筆の特性を生かして，「点画」の書き方を体感することによって，安定した書写力の定着につなげていくことができると考える。また，書写の学習を通して，知識や技能を自らが発見し理解していくことで，より確かなものとして身に付き，取り上げられている教材の文字だけでなく，ほかの文字や他教科の学びにも生かせると考える。書写で学んだことが，連絡帳や観察カード，お礼の手紙などに生かせるよう，他教科との関連を図ったり，相手を意識したりして，日常に学びを生かすことを目指したい。

3.2 研究の方法

3.2.1 授業における手立て

書写力を定着させるために，教科書の「書写のかぎ」を活用し，本時のめあてや学びのポイントを明確にし，しっかりと理解した上で確かな知識として身に付けさせていく。「めあてを確かめ，課題に気付き，見通しをもって考えながら書き，ほかの文字や言葉に生かす。」という学習を繰り返しながら，書写力を定着させていく。今年度は，特に，「学びをほかの文字や日常へ生かす」という点に着目し，書写での学びを知識としてしっかり身に付け，教材として取り上げられている文字だけでなく，学んだことと同じ要素をもつ文字にも，学びが生かされるようにしたい。それにより，深い学びにつなげたり，主体的に学習に取り組む態度を身に付けたりして，書くことが楽しくなり，喜びがもてる授業にしたい。

3.2.2 検証方法

授業の様子，子供へのアンケート調査，文字の定着を確認するためのワークシートなどをもとに検証する。

「めあてを理解し，自分の課題を見付ける」については，今までの学びの積み重ねと書写の原理・原則が活用されているか，授業の様子から検証する。「水書用筆を適宜取り入れ，効果的な学び方を行う」については，水書用筆や空書などを取り入れ，「はね」や「払い」の方向に着目し，次の画へのつながりを意識しているかを，授業の様子やワークシートで検証する。「学びをほかの文字や日常へ生かす」については，教材の文字だけでなく複数の文字を集め，共通する特徴を見出したり，分類したりして，学びをほかの文字に生かして書いているかをワークシートやアンケート調査で検証する。

4 総合考察

4.1 結果

4.1.1 検証授業（1） かたかなの書き方 文字くらべ

本単元は，片仮名と平仮名，片仮名と漢字などの類似点や相違点に着目し，文字どうしを具体的に比較することで，違いを意識して書く技能を身に付けることをねらいとして行った。文字の特徴や細かな違いを理解し，意識して書こうとする力が，既習事項を想起し正しい文字を確かめたり，今後の学習で文字を正しく整えたり，点画のつながりを考えたりしながら書くことにつながると考えた。

本時は，水書用筆を用いることで，力の入れ方の加減や滑らかな運筆ができるようにした上で，「止め」や「払い」などの違いを意識して書いているか，また，学んだことを生かし，学習した文字以外にも，文字の特徴や細かな違いを見付けることができたかについて，行動

確かな書写力を身に付け、書こうとする意欲を高める書写の授業づくり ～動きの学びから字形の定着を目指す～
 観察やワークシートをもとに検証することとした。

授業では、子供たちは、文字を比較して相違点を考える際に、これまでの学びを生かし、「折れ」「払い」「○画目」など、書写の用語を使って、具体的に説明することができていた。



図1 子供のワークシート（考える・書く）

また、点画の書き方だけでなく、画の長さや向きの違いなど字形にも目を向ける子供もおり、既習事項を生かして、違いを説明することができた。そして、その違いに気を付けて、「カ」と「か」、「モ」と「も」といった片仮名と平仮名、「ミ」と「三」、「ハ」と「八」といった片仮名と漢字を書くことができた（図1）。さらに、学びを生かして、本時で学習した文字以外のものも比較して違いを考え、違いに気を付けて書くことができた（図2）。振り返りでは、自分で考えるだけでなく、友達の発言から学びを広げる姿が見られた（図3）。また、今回、水書用筆を用いることで、力の入れ方の加減や滑らかな運筆を意識して、「止め」や「払い」などを書いているかということも、検証したいと考えた。しかし、本時の学習では、時間がなく水書用筆を十分に取り入れることができず、その効果を検証することができなかった。水書用筆の取り入れ方についても、ねらいに即した効果のあるものか、どのようなときに用いることがよいのかなど、検討する必要があると感じた。また、筆順を間違えて書いている子供も何人かいた。点画のつながりを考え、文字を整えて書くために、正しい筆順の定着や確認も大切だと改めて感じた。

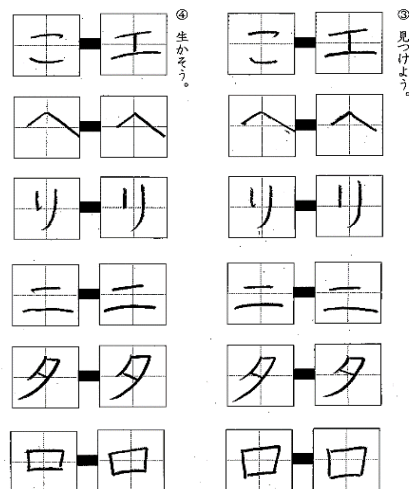


図2 子供のワークシート（生かす）

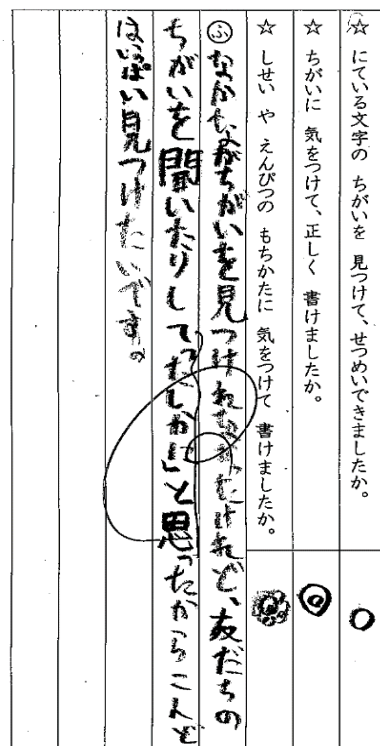


図3 子供のワークシート（振り返る）

4.1.2 検証授業（2） かん字の書き方 「おれ」のむきと「はらい」のむき

本単元は、「折れ」の方向の違いや「左払い」の方向の違いを捉えて、漢字の形を整えて書くことができるようにすることをねらいとして行った。「折れ」は、送筆の途中で一度止めて、方向を変えて書くものである。方向を変える際、「折れ」の方向にどのような違いがあるか理解し、注意しながら書くようにした。また、「左払い」は、だんだん力を抜いて終筆を払って

書くものである。教科書（東京書籍「新しいしよしゃ二」）では、4つの方向の違いについて取り上げられており、その違いを理解し、注意しながら書くようにした。「折れ」や「左払い」の方向の違いを見付け、理解し、意識して書こうとする力が、既習事項を想起し正しい文字を確かめたり、今後の学習で文字を正しく整えたり、点画のつながりを考えたりしながら書くことにつながると考えた。

本時は、「折れ」の方向には、まっすぐ下に折るものと、少し内側に折るものがあるということ理解し、注意しながら書くようにした。その際、「折れ」の縦部と横部の長さに着目し、「折れ」の方向の原則に気付かせたいと考えた。さらに、水書用筆を用いることで、力の入れ方の加減や滑らかな運筆ができるようにした上で、「折れ」の方向の違いを意識して書いているか、また、学んだことを生かし、学習した文字以外にも、「折れ」の方向の違いを見付けて書くことができたかについて、行動観察やワークシートをもとに検証することとした。

授業では、「折れ」の方向の違いについて、自分で考えるようにした。子供たちは、「折れ」の方向の違いだけでなく、画の長さや字形などにも着目して、違いを見付けていた（図4）。みんなで違いを確認した後、実際に硬筆で書く際に、水書用筆での練習を取り入れた。その際、教師が、折れの部分を「一度止めて真下に折る」、「一度止めて内側に折る」ということを意識して、水書で書くことを提示した。子供たちは、教師の書き方を意識しながら、水書用筆での練習に取り組み、硬筆でも、「一度止めて向きを変える」という動きを意識しながら書いていた（図5）。また、学習した文字以外にも、「折れ」の方向の違いを見付けて書くことができたかについても、漢字表から、「真下に折る」と「内側に折る」ということを意識しながら、文字を見付けることができていた（図6）。本時の授業に限らず、書写の学習では、学んだことと同じ要素をもつ文字はないか考えて書くようにしており、学んだことをほかの文字に生かせるような授業づくりを意識して行った。

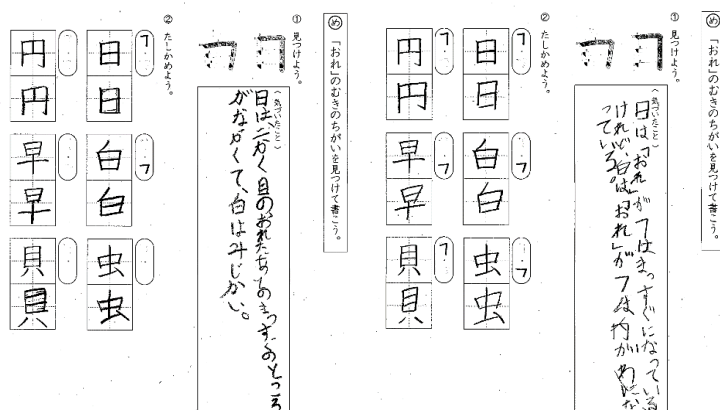


図4 子供のワークシート（考える・書く）

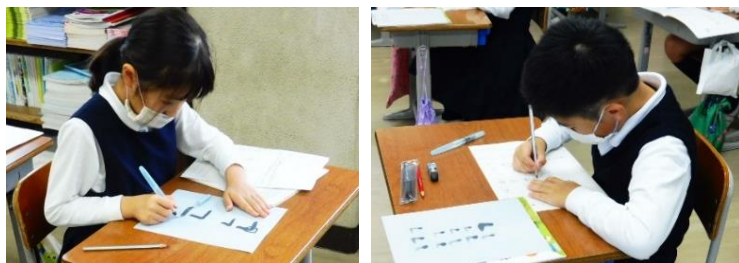


図5 水書用筆を用いた練習と硬筆でのまとめ書き

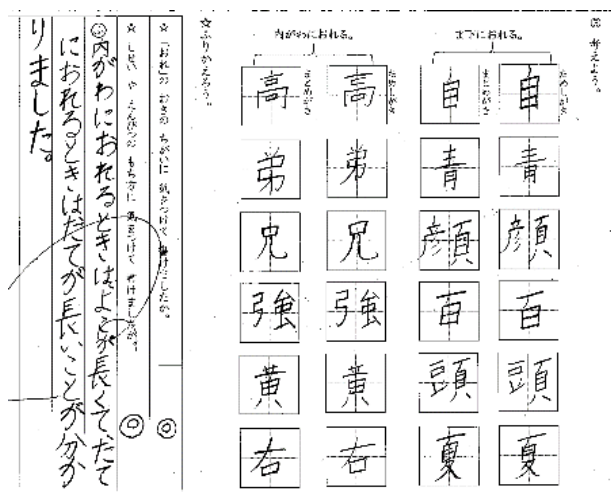


図6 子供のワークシート（深める・生かす、振り返る）

4.2 結果の分析と考察

書写では、研究の目的が達成できたかどうかを、日々の授業のワークシート、行動観察、アンケート調査などを用いて検証した。

「めあてを理解し、自分の課題を見付ける」については、めあての確認と、それに対する

確かな書写力を身に付け、書こうとする意欲を高める書写の授業づくり ～動きの学びから字形の定着を目指す～
 振り返りを毎時間行うことで、見通しをもってスムーズに学習に取り組むことができた。また、
 学習の最後には、自己評価や相互評価を取り入れ、めあてを達成できたか、良さや課題を書
 写用語を使いながら述べ、それによって自信を深めたり達成感を味わったりすることもでき
 た。また、「水書用筆を適宜取り入れ、効果的な学び方を行う」、「学びをほかの文字や日常へ
 生かす」については、その取組が有効であったか、12月中旬に、第2学年の子供（49名）に
 アンケート調査を実施した。

このアンケート調査では、文字を整えて書くために必要な知識・技能を「書写のかぎ」と
 して、学習して分かったことを記述し、それを生かして書いたかを、それぞれ学習中と普段
 の生活での書字について問うた。回答は、①書いた、②どちらかといえば書いた、③どちら
 かといえば書いていない、④書いていないの4つから選択させ、その理由がある場合につい
 ては自由記述とした（表1）。

表1 書写アンケートの結果

質問項目		①書いた	②どちらか といえ 書いた	③どちらか といえ 書いていない	④書いて いない
(1) 「止め」「はね」「払い」と「折れ」「曲がり」の書き方	学習中	53%	37%	6%	4%
	普段の生活	41%	35%	20%	4%
(2) 点画の書き方	学習中	61%	29%	8%	2%
	普段の生活	43%	39%	18%	0%
(3) 筆順のきまり	学習中	63%	35%	2%	0%
	普段の生活	53%	31%	14%	2%
(4) 「横画」の長さ	学習中	63%	29%	8%	0%
	普段の生活	57%	33%	10%	0%
(5) 「折れ」や「左払い」のむき	学習中	57%	33%	10%	0%
	普段の生活	41%	31%	22%	6%
(6) 画のつき方と交わり方	学習中	65%	31%	4%	0%
	普段の生活	55%	33%	12%	0%
(7) 文字の形	学習中	72%	20%	8%	0%
	普段の生活	47%	39%	12%	2%
(8) 水書用筆の使い方	学習中	63%	37%	0%	0%
	普段の生活	51%	27%	14%	8%

それぞれの項目について、具体的にどのようなことを学び、どのように書けばよいかなどを記述させたが、自分の言葉で、しっかり伝えることができるものは少なかった。後で説明したり、教科書で確認したりすると、「ああ。」「それなら分かる。」「気を付けて書いている。」といった言葉は聞かれたが、まだまだ自分のものとして定着していないと感じた。

項目ごとに見ると、(1)については、「止め」「はね」「払い」といった1年生のときから水書用筆を用いて繰り返し意識しながら書いてきたものについては、「ぴたっと止める」「ぴよ

んとはねる」「すうっと払う」といった回答や、左払いは「すうっと払う」、右払いは「一度止まってから払う」といった、左払いと右払いの書き方の違いを書いているものもあった。しかし、「折れ」「曲がり」のように、1年生のときは、水書用筆を用いずに書いたものについては、どのように書くかについての記述があまり見られなかった。(2)については、点画の名前と言われても、すぐに答えられない子供もいた。「縦画」や「横画」、「折れ」と言われれば、どのようなものを指すのかは分かるが、「点画」と言われても、何を問われているのかが分からない子供もいた。また、「そり」や「曲がり」といった点画の名前がすぐに思い浮かばない子供もいた。(3)について、学習中筆順に気を付けて書いていると肯定的に回答した子供たちは98%で、筆順を間違えることがあったので、気を付けて書いているといった記述も見られた。しかし、普段の生活では84%と、筆順に気を付けて書くことがややおろそかになっている様子が見受けられた。また、(4)の「横画」の長さについては、横画がいくつかあるときは、どれか1つを長く書き、あとの横画はだいたい同じ長さにするということによく分かっていた。(5)については、真下に折ると内側に折るという「折れ」の向きや、左横に払う、ななめ左に払う、まっすぐ書いて途中から払う、まっすぐ書いて最後だけ払うという「左払い」の向きについては分かっているが、普段の生活では、折れや払いの向きといった細部まで意識して書いていないと回答した子供の割合がほかの項目に比べて多かった。(6)の「つく」「離れる」「交わる」という画の接し方・交わり方については、よく分かっていた。これを正しく書かなければ違う文字になってしまうので、普段の生活でも意識して書かせるようにしたい。(7)については、1年生で学習した文字の形が、「縦長」・「横長」・「真四角」の3つだったのに対して、「上が広い」「中が広い」「下が広い」といった形も学習し、その違いを捉えたり、文字の形に気を付けて書いているといった記述も見られたりした。文字を整えて書くためには、外形（概形）を捉えることも大切であるので、書写の学習はもちろんだが、他教科の学習においても意識して取り組ませたい。

また、(8)については、水書用筆を使うときは、どんなことに気を付けて書こうとしたか問うた。「鉛筆の持ち方と同じようにした。」「はねはいったん止めて、ちょっと払いながら上にあげるとききれいに書ける。」「止めのときにびたってなるように気を付けた。」「払いのときはすうっ。いったん止めてすうっ。」「といった記述が見られた。「止め」「はね」「払い」を書くときに、特に意識して書いていると思われる。「そり」「折れ」「曲がり」「むすび」なども気を付けて書いている子供もいた。また、鉛筆と同じ持ち方で持つよう指導しているが、いわゆる習字塾に通っている子供の中には筆と同じように持つと回答した子供もいた。

4.3 研究のまとめ

4.3.1 結論

「めあてを理解し、自分の課題を見付ける」については、目的を明確にすることで、何をすべきかが分かり、見通しをもってスムーズに学習に取り組むことができた。それにより、めあてと照らし合わせながら、教材の文字と比べたり、友達と話し合ったりすることで、自分の課題も明確になっていった。

また、「水書用筆を適宜取り入れ、効果的な学び方を行う」については、今年度は、昨年度ほど使用した回数は多くないが、昨年度からの継続で、終筆の「とめ」や「払い」の違いを意識して書き、硬筆で確かめ、力の入れ方の加減や滑らかな運筆ができるようにすることをねらいとして行った。ワークシートや行動観察から、子供たちは、学んだことを生かして、硬筆で書こうとする姿が見られた。また、今年度は、「折れ」や「曲がり」などでの送筆部分でも、水書用筆を取り入れた。「折れ」の一度止めて向きを変える、「曲がり」の止めないでゆっくり向きを変えるといったところも、意識して書こうとしていた。

「学びをほかの文字や日常へ生かす」については、特に今年度重点を置いて取り組んだ。書写の学習の時間で、教材として取り上げられている文字は、ほんの一部分に過ぎない。しかし、書写での学びを知識としてしっかり定着させれば、それと同じ要素をもつ文字も、教材の文字と同じように書くことができると考える。そこで、学習の後半には、教科書の漢字

確かな書写力を身に付け、書こうとする意欲を高める書写の授業づくり ～動きの学びから字形の定着を目指す～
表から同じ要素をもつ文字を見付け、どのように書けばよいか考えて書くようにした。アンケートの結果を見ると、学習中は、学んだことを生かし、それを意識して書いている子供が多い。しかし、普段の生活となると、学習中に比べて、学んだことを生かしたり、意識して書いたりすることが少ないということが分かった。

4.3.2 課題

課題としては、書写の学習での学びが知識として少しずつ定着している様子は感じられるものの、それを日常に生かすというところまでは、十分にできていないということが挙げられる。書写の学習以外でも、新出漢字の学習やお礼の手紙など、正しく文字を書くことや相手を意識したものであれば、学んだことを生かして書こうとする姿が見られるが、日々のノートやワークシートへの書き込みなどでは、学びを生かして書こうとする意識は低いと感じられる。課題を解決するためには、授業の中で、相手意識をもち読みやすい文字を書くことや、基準となる字形をしっかりと見て課題を見付けたり比べたりしながら書くという習慣を身に付けさせたり、同じ要素をもつ文字を確認したりして、日常化につながる活動を意識して取り入れて指導していくようにしたい。書写での学びが書写の学習の時間だけで終わるのではなく、国語科を中心とした日々の学習と連動させ、学びを繰り返し積み重ねて続けていくことが大切であると感じた。それにより、知識を自分のものとして習得することができ、ほかの文字や日常に広げられると考える。また、水書用筆をはじめとして、習得した知識を技能に生かせるような練習も考えていくことも大切である。

4.3.3 今後の展望

今年度は、特に「学びをほかの文字や日常へ生かす」ことに重点を置いて取り組んできた。子供たちは、書写の学習では、課題を見付け、課題を解決する手立てについて考える姿や学んだことを生かして書こうとする姿が見られた。それを知識としてしっかり定着する授業づくりや手立てを考えていきたい。また、「水書用筆を適宜取り入れ、効果的な学び方を行う」については、本学年の子供たちは、昨年度から水書用筆を取り入れたことで、力の入れ方の加減が分かり、それを硬筆に生かして書くこともできるようになってきた。特に、1年生の終筆における「止め」「はね」「払い」において水書用筆を用いることは効果的であった。2年生では、1年生での学びを生かしながら、「折れ」や「曲がり」などについても、点画の始筆から送筆、終筆までの一連の動作を、送筆の途中の書き方など細部まで意識して書くように取り組んだ。低学年での学びや水書用筆を用いた学習がどのように毛筆書写に接続されていくのか、またどのような取り入れ方が効果的なのか考えていきたい。第3学年以降の毛筆書写で、始筆から終筆までの点画の書き方や字形など今までの学びを改めて意識して大きく書くことができると、文字の整え方の理解も深まると考えられる。さらに、それが硬筆の書写能力を養う基礎となるよう関連を図りながら指導したい。また、今年度から学習指導要領が完全実施となったため、第1学年の書写では、平仮名だけでなく、片仮名や漢字の書き方も、「止め」「はね」「払い」を中心として、水書用筆を用いて学ぶことが多い。1年生での水書用筆を用いた学びが、硬筆書写にどのように生かされるのかも興味深いと考える。

【文献】

青山浩之(編著)・愛知県岡崎市立山中小学校現職研修部・岡崎市現職研修委員会国語(書写)部(著) (2016) 書写力・語彙力・活用力の育成を位置づけた小学校書写 指導のアイデア&授業モデル—生きて働く「書字力」を育てる— 明治図書
全国大学書写書道教育学会編(2020) 国語科書写の理論と実践 萱原書房
文部科学省(2018) 小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社